

失語症カフェ

交流通じりハビリ

積極的な外出の契機に

【岐阜・いび川】JAいび川デイサービスセンター清流の里(揖斐川町)は、所属する言語聴覚士が軸となり、会話や読み書きが自由にできる失語症の患者や家族らが交流する「失語症カフェ」を、昨年度から定期的に開いている。患者は意思疎通がうまくできず、自宅に引きこもる人が多いとされる中、積極的に外へ出るきっかけになっている。

岐阜・JAいび川清流の里

「失語症カフェ」を、昨年度から定期的に開いている。患者は意思疎通がうまくできず、自宅に引きこもる人が多いとされる中、積極的に外へ出るきっかけになっている。

どが昨年からリピーターとして参加している。患者が書いたメモから伝えたいことを読み解くことで失語症の症状を理解したり、好きな物を選択するゲームをしたりして、交流を深めた。参加した患者の家族は「楽しい場で、情報交換や思いの共有ができて良かった」と話した。

JAの言語聴覚士の谷口明さんは「皆で楽しみながらリハビリを行い、今後も憩いの場として利用してほしい」と話す。カフェは同施設で11月18日と来年2月17日にも実施する。

JA岐阜厚生連揖斐厚生病院、県内の支援団体「県失語症友の会」「揖斐失語症友の会」と協力して開いている。失語症は、交通事故や脳卒中などで脳が損傷し、言語機能を失う症状。日本失語症協議会の調査では、全国で20万〜50万人が患っている。

全国に約3万人いる言語聴覚士が患者や家族に対する指導や助言に当たる。JAにも所属している他、岐阜厚生連に部署があったことがカフェ開催のきっかけになった。また、言語聴覚士の育成も目指している。

昨年度は4回開いた。各回、50人ほどが参加



憩いの場として失語症カフェで交流する参加者ら
(岐阜県揖斐川町で)